

# 教職員と生徒一体学校づくり

## 星槎国際高校帯広キャンパス

通信制の星槎国際高校帯広キャンパス（帯広市西3南9帯広経済センタービル3階、森実さとみキャンパス長、生徒98人）が、14日午後1時から帯広市内のとかちプラザ1階大集会室で5周年記念フォーラム「学校って何だろう会議」を開く。同キャンパスは不登校や高校中退、学習に悩みを抱える子どもたちの受け皿として年々生徒が増加、価値観を認め合える居心地の良い環境を、教職員と生徒、地域で一から作り上げてきた。フォーラム（参加無料）では、講演とパネルディスカッションで5年間の歩みと学校の在り方などを話し合う。

帯広キャンパスは2010年4月3カ所にキャンパスを持つ。月に学校法人国際学園（本部神奈川県）が開設。道内ではほかに、帯広の開設当初は4人の生徒が本部校（芦別市）と、札幌学習センター、さっぽろ教育センターの3カ所に通う。現在は50人、現在は98人が通う。十

勝管内のほかに、釧路など道東圏からも多くの生徒が入学し、地域の学校として着実に歩みを進めてきた。

生徒は自分のペースに合わせて学習や課外活動に臨み、卒業に必要な単位を修得する。通学は週2～5日。必修科目のほかにゼミなどの総合的な授業の比重が高く、ゼミでは学年を超えて一緒に授業を受ける。また、商店街調査など地域と積極的に関わり活性化にも貢献している。

当初は学校行事はほとんどなかったが、生徒の要望で行事や部活が年々増えた。11年から始まった強歩遠足、12年からの学校祭などは生徒の声で実現した。初めはなかった部活動は現在、バスケットボール、バドミントン、陸上競技、ライブアクトなどに充実。生徒は放課後に友人らと体を動かしたり、趣味の活動に励んだりする。ゼミも年々増え、今年は「ビブリオゼミ」や「音楽ゼミ」などが誕生した。

生徒と教職員との距離が近いことも特徴の一つ。職員室の扉はいつも開かれ、生徒が気軽に相談や雑談に訪れる。森実キャンパス長は「職員室もお互いの関係性を築くために大切な場所」と話す。

## あす5周年記念フォーラム 在校生や卒業生も登壇

今年度の学校祭（9月12日）は多くの卒業生も訪れ、会場設営を自ら手伝うなど卒業後の結び付きも強い。生徒は学校生活を通じて友人ができ、同様の悩みを抱える生徒がいる安心感の中で、将来の目標や夢を探していく。

14日のフォーラムでは、森実キャンパス長が「一緒に学校をつくらう」帯広キャンパス5年間のあゆみ」と題して講演する。また千葉孝司さん（ピンクシャツデーとかち発起人代表）も「心の居場所を探そう」いじめ・不登校を乗り越える」のテーマで講演する。

続いて「学校って何だろう？」と題したパネルディスカッションも予定。在校生や卒業生、保護者、教員をパネリスト、星槎大学の鬼頭秀一教授をゲストに招き、学校の在り方などを話し合う。

森実キャンパス長は「生徒や保護者だけでなく、地域の方に来ていただければ」と話し、今後に向けて「子どもの数は減っているが、多様な学び方を必要とする子どもは増えている。そうした子どもたちが来られるような教育環境をつくっていきたい」と話している。

フォーラムの参加申し込み・問い合わせは同キャンパス（0155・22・3830）へ。

（松田亜弓）

# 教育



生徒の発案で始まった強歩遠足。晴天の下、仲間と一緒に笑顔で駆け抜けた（6月3日、十勝川河川敷で）